

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第570号 平成25年7月2日

北の縄文

世界最古の調理跡が、北海道と福井県の遺跡から発見されたというニュースは、改めて縄文文化の質の高さを感じさせるに十分なものといえましょう。

このニュースは、英ヨーク大学や新潟県立歴史博物館等の研究チームが、北海道帯広市や福井県若狭町などの遺跡から出土した土器の破片100個以上を分析したところ、「およそ1万1800年前から1万5000年前に、魚などを煮炊きした痕跡が発見された」というものです。また、残留物の元素を詳しく調べたところ、「食材の多くは海の幸だったが、淡水産に似た特徴を含む残留物も一部に見られたことから、サケのように海と川を行き来する魚を調理した可能性もある」としています（4月11日付読売新聞）。

これまで最も古い調理の痕跡とされていたのは、地中海東沿岸地域で出土した約9000年前の土器から発見されたミルクを過熱した跡だったという事ですから、今回の発見によりその記録が一挙に数千年も前に遡る事になり、考古学の歴史を塗り替える画期的な発見といえます。しかも、それが北海道の遺跡から発見され、世界の人々に知られる事になった事は誇るべき事です。

さて、北海道で出土したという土器は帯広市内の「大正3遺跡」で発見されたものです。

「大正3遺跡」といわれているのは、帯広市街地の南約15km、途別川の左岸に点在する1～8の遺跡を総称する「大正遺跡群」の一つです。

帯広及びその周辺にヒトが住み始めたのは、今から約3万年前の旧石器時代の事で、その後、1万4千年程前には土器が作られるようになったといわれています。遺跡の数（平成23年4月現在）は、「大正遺跡群」を含め十勝管内で1082カ所、帯広市内で59カ所の所在が明らかとなっています（帯広市埋蔵文化財センター資料等から）。

「大正遺跡群」で特筆すべきは、出土した土器の古さといわれています。特に「大正3遺跡」から出土した「北海道最古の土器」は、土器に付着していた炭化物の年代測定で約1万4千年前ということが明らかとなっていますが、今回、研究チームによって世界最古の調理の痕跡が発見された事で、改めて「大正3遺跡」の重要性が世界的にも認知されたのではないかと思います。

私が子どもの頃学校で習ったのは、米作りを初めとする文明・文化は弥生時代以降大陸から朝鮮半島を通してもたらされたもので、縄文時代は狩猟・採取による原始的な生活をしていた、というものでした。

こうした、縄文時代の人々に対する偏見は今日、大きく改められつつあります。

これ迄の考古学の研究によって、

- ・ コメは佐賀県唐津市の2600年前の菜畑遺跡から水田跡が発見され、
- ・ 紡織技術は九州で発掘された4000年前の土器の圧痕にすでに布目が確認され、
- ・ 高倉倉庫は5500年から4000年前の三内丸山遺跡でその跡が多数見つかっています。

また、漆の技術についても大陸から伝わったものではなく、9000年も前、縄文時代に存在していました。その事は、2000年に北海道「垣ノ島B遺跡」の縄文時代早期の土坑墓から出土した漆副葬品から判明しています。

このように縄文時代は、想像以上に豊かで多様な文化で彩られていた事に驚きを感じます。

「NHK三内丸山プロジェクト」の岡田康博氏は、縄文時代の人々の暮らしについて「

これまで日本列島の各地域には、それぞれ固有の自然環境に適した生活戦略が確立していました。地域の四季折々の自然の恵みを、計画・多角的に利用し、地域の歴史を積み重ね、日本の歴史の地域的な単位となってきました。

また、海洋適応、植物質食料への依存、木材・繊維など植物素材の多用や漆の活用、煮る加工・調理法、季節的な労働スケジュール、平等を原則とした共同体などの点でも、日本の基層文化の多くを形成した時代でもありました。」と述べると共に、「100年後の考古学者は、きっと今ごろを縄文時代以来の最も大きな物質文化の転換期として、時期区分するでしょう」とのべています(同氏著「縄文文化を掘る」)。

縄文時代は、約1万年以上も平和で、安定した社会を形成していました。それは、その後の弥生時代、古墳時代、歴史時代を遙かに超える長さです。私達は今かつてない閉塞状況に置かれていますが、こういう時だからこそ、改めて縄文人の生き方や知恵から学ぶ事は多いのではないのでしょうか。(塾頭：吉田 洋一)